

20年間を振り返って



(株) 第一コンサルタンツ
右城 猛(建設/総合技術監理)

■創立当時の思い出

高知県技術士会が発足したのは、昭和61年10月である。佐川町に事務所を出し、高知県下で地域計画の仕事をされていた金山隆一氏(京都在住)が「各県で技術士会が誕生している。高知県でも立ち上げてはどうか」と私に話を持ちかけたのが発端であった。

高知県技術士会を立ち上げると言っても、私はこの年の4月にUターンして第一測量設計コンサルタント(現・第一コンサルタンツ)に入社したばかりであった。技術士で知っていたのはサン土木コンサルタントの村山保先生と相愛の中村和弘氏くらいであったので、多分、お二人に最初に相談を持ちかけたような気がする。

設立総会の記憶は、私の頭から完全に飛んでしまっていたが、川村喜一郎氏がメモ書きを残されていて、教えてくれた。

設立総会は10月27日(月)に、高須の電車通りに面した談話室「青山」で開催している。高知県橋梁会の理事会である「一水会」を毎月開催していた場所であった。会員は村山保氏、山本克彦氏、川村喜一郎氏、池田正氏、片岡明氏、金山隆一氏、瀬戸正美氏、竹村和夫氏、中村和弘氏、原義朗氏、深谷新氏、山本巖氏、橋口孝好氏と私の14名であった。設立総会には12名が参加している。会員の半数以上は、公務員や大手企業を定年退職した後、技術士の資格を活かして民間企業で活躍されている人々であった。橋口氏と私は昭和25生まれで最も若かった。

会長には、設立総会の選挙で村山先生が選出された。私は書記という立場で、事務局を担当することになった。私の事務局の仕事は、明坂宣行氏と交代する平成6年まで続いた。

設立の年から平成5年までは、年3回定期総会

を開催していた。定期総会といっても、事業報告や会計報告などは年1回であるので、ほとんどは懇親会であった。懇親会は、参加者の近況報告から始まるのが恒例であった。これはずっと続けたかったが、参加者が増え、スピーチの一人の持ち時間を減らしても時間が足らなくなった。それで数年前よりやめている。

近況報告の後は、会員同士で酒を酌み交わしながら情報の交換と親睦を深めた。設立当初は、参加者が10名程度であったので、一人一人とじっくり話すことができた。現場の経験に裏付けされた先輩の話は、とても参考になった。

今は情報社会と言われていて、ネットで検索すれば大概のことは即座に調べられる。便利な世の中になった。しかし本当のことは、ネットや本を読んだだけでは分からない。講演を聴いても分からないと思う。人は、成功の理由や自慢になることは詳しく話す、本当に知りたい失敗談や肝心なことは、直に顔を合わせ、酒を酌み交わさない限りなかなか話してくれない。

高知県技術士会の先輩達は、科学技術に関する知恵袋である。若い会員の方は、仕事に追われて大変だと思うが、定期総会にはできるだけ参加し、先輩達が長年の経験に基づいて蓄積してきた知恵を、是非とも受け継いでもらいたい。

■会報の発刊

本会の会則の第3条に、「本会は、高知県における科学技術の進歩・発展に寄与するとともに、会員相互の研修・技術交流および親睦を図ることを目的とする」と明記してある。宴会だけでは、会の目的を達成することはできない。会員の日頃の研究成果、論文などを編集し、会報として関係官庁に配布すれば、高知県における科学技術の進

歩・発展に寄与できるし、技術士の認知度を高めることができると思えた。

平成元年春の総会で会員の同意を得、その年の9月「高知県技術士会会報 VOL.1」を発刊した。表紙には、THE BULLETIN OF SOCIETY OF CONSULTING ENGINEERS と書いてある。これは村山先生が英訳してくれたものである。会報の印刷・製本の費用は、会員が所属する会社に広告の掲載をお願いし、その代金で賄った。

会誌を発行したのは、中・四国でも高知県技術士会が最初であったのではないだろうか。四国では、愛媛県と徳島県が平成5年、香川県が平成9年に会報を発刊している。

高知県技術士会には村山先生を筆頭に、筆が立つ会員が揃っている。過去の会報を調べてみると、村山保氏、川村喜一郎氏、中村和弘氏と私の4名は、創刊号から昨年度の17号まで全てに投稿している。山本克彦氏と竹村和夫氏は16回で、1回休んだだけである。和田達夫氏と小川修氏は入会后1回も休まず14回投稿している。

会報の編集は、VOL.5までを私が担当し、VOL.6以降は明坂氏が担当している。VOL.3の編集後記に『今年の夏は、昨年に次ぐ猛暑でしたが、投稿締切りの8月31日までに原稿のほとんどが集まりました。毎年のことながら、原稿の集まる早さに感心させられます。今回も、早く投稿された方に敬意を表し、原稿到着順に掲載させていただきました。創刊の折、何年続くだろうかと心配したものでしたが、年々ページ数が増え、内容も充実したものになっています』と書いている。

他県では、会報を出そうにも原稿がなかなか集まらないので苦勞する、という話を聞く。私は原稿の執筆を催促したことは一度もなかった。むしろ、早さを競って投稿されていたようにさえ感じられた。

過去の会報をめくると、懐かしい会員の顔が次々と浮かんでくる。内容も素晴らしい。永久保存にしたいものばかりである。

平成3年のVOL.3には、故・深谷新氏の遺稿「Ruhr(Rhein 右支流域)の水管理と人工涵養」を掲載している。会報の原稿は、ワープロで書くの

を原則としているが、これだけは深谷さんの自筆原稿である。

深谷さんは、松尾橋梁(株)、鉄道工業(株)、建設省、日本建設コンサルタント(株)を経て、昭和59年に(株)相愛に入社された。昭和61年に国際水文学会へ出席した際に、西ドイツ、オランダ、ハンガリー、オーストリア、フランス各国を視察し、それを「国際水文学会出席並びに欧州人工涵養調査旅行報告書」と題した80ページのレポートにまとめている。

深谷さんが亡くなられた後、中村和弘氏にそのレポートを見せられた。手書きの図面と文字のあまりにももの美しさに驚嘆させられた。会員に是非紹介したいと中村さんをお願いし、その一部を深谷さん自筆の原稿のまま掲載させて頂いている。是非一度ご覧になっていただきたい。

会報を発刊した当初は、会員の7～8割の方が原稿を書いていた。会員数は年々増えているが、逆に投稿率(投稿数÷会員数)は減る傾向にある。気になるところである。

■村山保先生のこと

高知県で土木の話をするときに、村山先生を抜きに語ることはできない。私が先生のお名前を知ったのは、昭和42年だった。高知工業高校土木科の一年生のときに習った「測量」の教科書は、先生の著書であり、三年生で使った土木施工管理技士や就職試験の問題集は、村山先生と宮田隆弘先生の共著であった。先生は、私にとって憧れの存在であった。

直接お会いしたのは、第一コンサルタンツに入社した昭和61年4月である。先生は、サン土木コンサルタントの会長の傍ら、高知県建設高等職業訓練校の校長や高知県橋梁会会長を歴任されていた。私は、先生の下で書記や理事、訓練校の講師などの役を仰せつかり、お手伝いをさせていただく中で、いろいろとご指導を賜ることができた。本当に幸運であったと思っている。

私は平成元年に、「擁壁の設計法と計算例」という著書を理工図書から出版した。どこの馬の骨とも分からない者が書いた原稿を、名門の理工図

書が出版してくれたのは、先生のお口添えのお陰である。先生は「測量」、「鉄筋コンクリート構造物設計例集」など理工図書から沢山の本を出版されていた。先生の推薦を断ることはできなかったのだと思う。

私の本の売れ行きは、理工図書の予測をはるかに超えたようである。その後に理工図書や日経BP社から執筆のお誘いを頂くことになるが、この本がきっかけになっている。

平成9年9月24日に、私の工学博士の学位の公聴会が、愛媛大学であった。そのとき村山先生が、宮田隆弘先生、今西清志先生、中村和弘氏、明坂宣行氏を伴ってわざわざ高知から駆けつけてくれた。涙が出るほど嬉しい思いがした。

私は高知県技術士会に、2度も盛大な祝賀会を開催してもらった。昭和61年に処女作「中小橋梁の計画」を出版したとき、平成9年に「工学博士」の学位を授与したときである。発起人代表はいずれも村山先生で、漢語調の格調高い挨拶をして頂いた。あのときの感動は未だに忘れることができない。

村山先生は、長年の教育活動における実績が評価され、平成元年に勲四等瑞宝章を受章された。平成7年には四国で初めて、高等学校の校長経験者としては全国で初めて、土木学会名誉会員とされた。土木工学または土木事業に関する功績が特に顕著であって理事会が認めた者についてだけ与えられる大変名誉ある称号である。

高知県技術士会は、他県の技術士会に比べて会員数が少ない。しかし、会員の資質は勿論のこと、会の内容は、どこにも引けをとらない。素晴らしい会に成長した最大の力は、会長であった村山先生の高潔で品格に優れたお人柄にあったことは疑う余地がないであろう。

村山先生のごことは、74才になられたときに、自ら編集・執筆された「回顧録」(A5版360頁)に詳しく紹介されている。

■故・瀬戸正美さんのこと

瀬戸さんは、定期総会には必ず出席し、趣味の面打ちの話や土木技術者の心構えなど、示唆に富

む話をいつも聞かしてくれた。「土木工学は足の裏の工学だ」、「現場は、自分の足で歩いて、地球の凹凸を足の裏で感じることで、本当にわかる」といった経験に裏打ちされた言葉には、説得力があった。

瀬戸さんは、平成8年から平成12年までの間、27回にわたり高知新聞の「新聞を読んで」のコラム欄に、「県技術士会 瀬戸正美」という名前で執筆されていた。世の中の出来事を土木技術者の視点から分析して書かれた鋭い論評は、多くの読者の心を惹きつけた。

その中に、定例総会で私が喋ったことを取り上げてくれたものがある。「人体この不思議なもの」(1998年5月31日)と題する記事である。「短大卒で工学博士」と報じた新聞記事を、私の中学時代の友人が、くも膜下出血で意識不明の状態が続いていた私の母の耳元で読んで聞かせたところ、それまで全く反応のなかった母が泣き出した、という話である。

高知県技術士会会報、高知新聞、高知県正昭会誌等に投稿された瀬戸さんの論文は、ご遺族によって、瀬戸さんが生前に好んだ言葉「念ずれば花ひらく」を表紙に刷り込んだA5版341頁の立派な本として出版されている。

■あとがき

創立以来16年間にわたって村山先生が会長として本会を支え、会の発展に尽力されてきた。平成14年度から私が高知県技術士会の代表幹事を仰せつかり、今日に至っている。

高知県技術士会が歩んできたこれまでの20年間は、私の青年期と符合している。人生にとって最も大切な時期に、素晴らしい先輩や仲間に出会うことができた。人間として大事なことを教えて頂き、助けられてここまで来た。そのお陰で、楽しく、有意義で、充実した日々を過ごすことができたと思っている。村山先生をはじめ会員の皆様に心より感謝申し上げます。

(2006.9.10記)